『やまなし』（宮澤賢治）の授業分析

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小林信次（日本福祉大学）

一　はじめに

　国語の授業で、宮澤賢治の『やまなし』はファンタジーなので、どう教えてよいのか迷うという声をよく聞きます。私も、実際には、現場で授業をする機会がありませんでした。今回、実習生（鈴村さん・仮名）が『やまなし』で挑戦することになりました。

大学は「子ども発達学部」で、教員養成の学部です。毎年、１０月に教育実習に行きますが、担当の教官と実習生の間で指導が行われます。その一つに実習生が担当教官に「学習指導案」と「授業記録」をメールで送り、その送られてきた「指導案」と「授業記録」に「コメント」をするといことがあります。実際に教育実習生の学校に参観に行きますが、遠距離で参観できない実習生もいて、担当教官と実習生のメールの交換は、実習生に力をつけるというねらいもあります。（多くの実習生は、担当校の先生方と指導案を作成しています。）

今回、紹介するのは、６年生のクラスの実習生・鈴村さんとの国語の『やまなし』の授業分析などの報告です。

いずれも、送られて来た「国語科学習指導案」と「授業記録」に私（小林）は（赤）で書き込みをしています。

二章では、学習指導案への書き込み、三章では、授業記録への書き込みを取り上げています。この授業は参観することができなかったので、メールでの分析だけになっています。

二　『やまなし』の指導案へのコメント

私は、指導案が送られてきた時、まだ、どう読み取らせたらいいのか、教材研究の途中でした。とりあえず、鈴村さんの指導案を生かす形で、どう読み取っていくのかという視点で書き込みも助言しています。

　以下、鈴村さんの指導案（一部文）と私のコメント（赤）です。

第６学年　組　　国語科学習指導案

　　　　　　　　　　　　指導者　鈴村

１　単　　　元（題材・主題）「やまなし」

２　立案の立場……

1. 本学級は、

この教材の分析は、良いと思います。指導書を参考にしていると思いますが。もう一度、鈴村さんが、この教材で『やまなし』で、教えたいことをまとめて下さい。特に「５月」では、何が教えられるのか「１２月」では、何が教えられるのか。というより、教えたいこと、伝えたいことを明確にする。

この場合、「読み取らせ方」として、子どもたちに何を手がかりにするのか、繰り返すと、読み取らせ方を持つということです。鈴村さんの、本時の計画の中にも書かれていますが。

そして、「５月」「１２月」との対比で、この作品のあるいは、賢治の描いた世界はなんなのかをはっきりさせる。この場合、不明確で、つかみ所がないかもしれませんが、これが正しいというのでなくて、鈴村さんの読み取りで良いです。

1. 本教材「やまなし」は、宮沢賢治の深い思想性を持つ作品のひとつである。また、擬声語、擬態語、造語、色彩表現、比喩など、読者が想像力を膨らませ、豊かに広げるための言葉がちりばめられている。

「やまなし」の構成は、冒頭部分に「小さな谷底を写した、二枚の青い幻灯です。」とあり、中の部分で「五月」と「十二月」の二つの場面が位置づけられた、額縁構造になっている。「五月」では、春の輝く太陽の中で、「かわせみ」による命の奪い合いが目まぐるしく展開する。かにの兄弟は、いつ襲いかかるか知れない死の世界を恐れとして感じ取る。「十二月」では、「やまなし」が、あらゆるものが影を潜める冷たい冬の水中に、豊かな生命のぬくもりをもたらす。これら二つ世界を対比させながら読ませ、児童の言葉でまとめさせることにより、本教材の題名が「やまなし」である意味について考えさせたい。

1. この作品は多くの比喩表現が使われ、造語も含まれている。擬人化された登場人物である。また、谷川のかにの視点から空想上の独特の世界観が繰り広げられており、児童にとってはこの世界観を理解するのがやや難解である。そのため毎回授業の導入で音読を繰り返したり、各自での黙読の時間をとったりし、全体では一文一文の表現を噛み砕きながら読み進め、丁寧に指導していく。

３　単元の目標と評価基準

1. 目標

この目標で良いと思いますが、「擬声語・・・・・」の中でも「本時の目標」は、明確にしておくと良いでしょう。鈴木さんの指導案から察すると「谷川の様子、出来事、かにの会話や様子から」と「かわせみ」との事で書けそうですが。

　　○作品の中で使われている擬声語、擬態語、造語、色彩表現、比喩などの表現を味わい、作品の情景を想像することができる。

　　○「五月」と「十二月」の二枚の幻灯を比較し、谷底の様子や筆者の表現する世界観を読み取ることができる。

　　○作品に対する自分なりの感想を持ち、表現することができる。

鈴村さんの、指導過程が、十分につかめませんが。「５月」全体を扱うみたいですが。事件というのか場面の移りで、まとめていくのか、一つの場面はとしてみていくのか、私・小林は、大まかに、かにの兄弟の登場、魚の登場、かわせみの登場、お父さんの登場という展開（筋）があると見ています。

この筋を順に追う指導過程も考えられるということですが。

鈴村さんは、読み取り方として、二つの視点があります。一つは、「色をあらわす言葉」「～のように」（比喩）に着目しています。もう一つは「谷川の様子」「かにの会話」「出来事」の三つに着目して読ませようとしています。そして、「かわせみがでてきた時の様子へ」とつないでいます。鈴村さんのこの構想はとても、よく考えられています。

　ただ、このクラスの子どもたちが、この指導過程に対応できるかどうかです。指導過程を考えると２時間は取りたい内容に思えます。

（４）指導過程

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 段落 | 学　習　活　動 | 教師の支援と指導上の留意点 | 評価の観点 |
| 導入５分 | １　前回の話の復習をする。（２分）２　本時の学習のめあてを確認する。（１分）「谷川の様子」「出来事」「かにの会話や様子」に注目し、情景を想像して朗読しよう。３　「五月」の幻灯を全員で音読する。（２分） | ・前回の学習内容を口頭で説明する。・模造紙を黒板に貼る。・全員でめあてを読むよう指導する。・机間指導を行う。・児童が音読に詰まった場合は、その部分を読む。 | ・積極的に声に出してめあてを読んでいるか。（関心）・音読できているか。（関心） |
| 展開３５分 | ４　教科書の本文で、色彩を表現する言葉に丸を付け、隠喩法が使われている部分に波線を引く。（一人読み）（５分）５「谷川の様子」「かにの会話や様子」「出来事」の三つの観点に沿って想像したことを話し合う。　　（２０分）ここのところが、子どもにとって、分かりにくいだろうと思われます。「谷川の様子」「かにの会話」「出来事」の区別がつくのか。会話は分かるが。　なぜ、三つに分けて、何を基準に「想像したことを話し合うのか」、もっとこの場面、ここからと、指定して想像させるということでしょうけど。このあたり、もっと明確に。６　「かわせみ」が現れたときの様子を整理する。　（１０分） | 「教科書の本文を読んで、色を表す言葉を丸で囲ってください。また、～のようにという隠喩の比喩表現が二箇所出てくるので、そこには波線を引いてください」この「色」と「～ような」を全員が捜し出してし、浪線を引けるどうか。鈴村さんが、例を一つずつ示した方が良いでしょう。・黒板に本文を書いた模造紙を貼る。・模造紙に印刷した教科書本文にペンで書き込みながら、４を含め内容を確認していく。※学習プリントにあらかじめ指定した語句の意味を書き込ませておく。・教科書本文の「谷川の様子」「かにの会話や様子」「出来事」を表しているところを色分けする。・十二月の谷川の様子と対比できるよう、対比表に整理する。この場面の扱いで、「５月」と「１２月」の対比の文章としてさがすだけなら、スムーズにいくかも。・「かわせみ」が現れたときの様子、それを見ていていたかにの様子をとらえさせる。この場面は、外の世界の「かわせみ」の怖さが読み取れます。「兄弟のかに」の恐怖と「父親がに」による安心感を対比して読みこめます。様子として、どこを読みのどの文を視点にするのかはっきりさせた方がいいです。・「かわせみ」の出現で谷川の様子が変化することに気付かせ。 | 線引きだけにするのか、その意味を掘り下げるのか。５分だと短いので、線引きだけになる、とすると、次の「５」の展開との関係をどうするのか。・谷川の様子」「かにの会話や様子」「出来事」の三つの観点について想像を話しそれを話し合うことができたか。（関心・思考） |

三　『やまなし』の授業記録とコメント

　上の指導案とは、授業時間が一致していませんが、送られてきた授業記録にコメントしていきました。ここで紹介した、授業記録は一部です。

授業記録は、実習生が、ビデオに撮って、記録を起こし、下のような形式に則して記録していきます。「コメント」の欄は、鈴村さんのようにくわしく書けない実習生もいますが、私のコメントはできるだけ授業に即して具体的にコメントするようにしています。

**授　業　記　録　用　紙**

　　　　　　教科　国語　　　　単元　やまなし

　　　　６年　　組　　　　　授業者　鈴村

　記入（赤）　小林信次

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 教師の指導言（発問、説明、指示、助言、評価）、指導行為（机間巡視）、板書 | 子どもの発言、学習行為（班、氏名、発言内容） | コメント、備考 |
| 「今日からやまなしとう作品を読んでいきます」「教科書の１０８、１０９ページを開いてください」「突然ですが、皆さん音読と朗読の違いって分かりますか？」「音読っていうのは、、」「そうそう。声に出して読むこと。」（板書）「では朗読って何だった？」「朗読っていうのは、声に出すのだけど、相手に伝わるように読むことです」（省略）（板書）「今日はこの５月の谷底の様子についてお話を確認していきます」「まず自分で教科書に書き込みをしてもらうんだけど、その説明をします」「様子を表す言葉と、色が書かれた言葉にチェックしてもらいます。様子を表す言葉っていうのは、具体的には擬態語と比喩表現っていうのがあって、擬態語は、ものごとの状態、身振りをそれらしく表した言葉が書かれた言葉で、「何々のように」という言葉と、直接表すことばがあります。もう習った？」「習ってないのかなあ」「今から２分時間を取るので、探してみてください。はじめ」（机間巡回、本文の拡大紙を黒板に貼る）「様子を表す言葉と、明るさ、色を表す言葉ね」「はい、やめてください。せっかく考えてくれたけど、この答え合わせは最後にみんなで確認していきますね」「ところで今までの登場人物、人物？生き物？は何がいた？」「そうだね、今日は、この登場人物の絵をみんなに完成させてもらいます。なので、グループで考えてもらうので、机をグループにして、できたら前に紙があるので代表の人は取りに来てください」「そうそう。クラムボンって何かみんなよくわからなかったよね。教科書にも書いてあるけど、作者が作った言葉で意味はよくわからないのです。だから、クラムボンはみんなの想像に任せます。自由にイメージしてみてね」「では、説明しますね。青い紙を配ったと思うんだけど、これが背景です。背景は、こんな感じで、下、つまり下流が左、上、つまり上流が右、上は水面で下が水底ね」（説明図を黒板に貼る）「グループ対抗戦で、絵を完成させてもらうのでね」「あと、気を付けてほしいのは魚の向きです。裏表どっちにも絵を描いたので、色も塗ってほしいし、上下左右の向きを考えてね」「上に向かってるのか下に向かってるのかは、ちょっと先の文を読めばわかりますが、ここが一番難しいかな。教科書とにらめっこして絵を完成させてね」（タイマーセット）「おっ、それは後で説明するので教えられません。班で話しあってみて」「できたら持ってきてくださいね」「では、本文を確認しながら、みんなの絵を確認していきます」「二匹のかにの子どもらが、登場しますね。川底で話していました。みんないいね、下にかにをかけたね。そして、クラムボンは笑ったよ。クラムボン、笑ってるんですね。カプカプ笑ったってどんな笑い方ですかね。上の方や横の方は、青く暗く、さっき書き込めなかった子はチェックしておいてね。上は、水中のかにからみた水面の方です」「鋼ってわかる？これは包丁とかの色だね」「なめらかな天井っていうことはどんな天井かなあ」「どっちかっていうと、賑やか？静か？」「そうだね、波がたっていたら。なめらかではないよね」「つぶつぶ暗い泡が流れていきます。ここの説明を忘れちゃったけど、最初に流れたあわは暗いほうのあわです」「あわ、ぽつぽつぽつと５・６粒はいたと書いてあるから、みんなの絵も５・６粒かけていた人が正解です。（省略） | 鈴村さんは､この後の時間で研究授業をやったので、授業記録を取り上げるなら、そっちの方が、値打ちがあるかも。思ったようにいかなかったとしても、一番集中した授業だったと思うので。余裕があるとき､挑戦して下さい。「声に出す」ここの切り込みは、重要だけど、なぜ、様子を表す言葉と擬態語に注目するのかが伝わってないのでは。教科書に書き込む「・・・。」教科書に書き込む「かにの兄弟」「魚」「クラムボン」机をグループにする班長が教卓に紙を取りに来る絵を完成させる作業「先生、ひるがえすってどういう意味？」「・・・」「・・静か」「声に出さない？」 | この時間の目標がつかめないけど、おそらく、全体の読みと大まかな構成とそれに関わった場面の様子と意味調べということでしょう。鈴木さんは、この欄にたくさんコメントが書けているので､ある程度分析ができたということです。「朗読」と「音読」の区別はつけにくいけど、相手に伝わる読みという説明は良いです。最初に全文を読まなかったため、初回で構成を急に教えたのは、理解するのにやや難しかったのでは。作品を一通り朗読する時間を取るべきであった。ここの「様子」「明るさ」「色」へ注目するのはよいけど、子どもは、その作業ができたのか。「クランボン」も入れたのはおもしろいけど。混乱するので。自由なイメージにしたのはよいかも。本時の学習の順を視覚的に明確にさせるためにホワイトボードに流れを書いたが、以後磁石を動かし忘れることがあった。一つに集中させるためには、ホワイトボードでいいけど。魚の向きにこだわっているのは、これからの読み取りの視点を持たせるのにはいい。グループ・班の作業はうまくいったのかな。絵が上手くか完成したらいと思います。ただ、完成した絵がどの場面を表しているのか、文章に即して確認することが大事。対話ができず自分で自己完結してしまった。一度自由に発言していいということを伝えたり、正解などと言う言葉を用いないようにして、会話しやすいような環境作りをするべきであった。見開き1ページ全てを範囲にするのは児童にとって難しかった。範囲を絞るべきであった。この鈴村さんのコメントは、実際やってみると難しいということが分かったということでしょう。ここで教師の方が意味を聞いているが、子どもが辞典で調べたことがあれば、引き出すようにする。このあたりは絵にこだわっているのでよいかも。 |

四　まとめ

実習生とのやりとりをした後の感想としては、『やまなし』は、やはり授業するのに困るだろうなという印象を持ちました。また、実習生の鈴村さんの授業記録をどれだけ読み取って助言できたのか不安もありました。『やまなし』の何をどう教えていくのかといううとき、学習の手引き（光村図書｝）にあるように対比ということでの指導が考えられます。

・・・・・

「やまなし」は、「五月」と「十二月」の二つの場面で構成されている。次のことに着目して対比し、感じたことや考えたことをまとめてみよう。

1. かにの会話や様子　②水の光や様子　③色　④上からきたもの

・・・・・・

手引きの項目は、読み研でいうならば、①「かにの会話･様子」は人物形象②「水や光」は情景描写（文体）　③「色」は情景描写（文体）④「上からきたものかわせみとやまなし」は､強いていえば人物形象を読み深めるということになるだろう。手引きには、事件をどう把握させていくのかという点はないようです。

このような視点をもち、五月と十二月の対比は有効な指導法であることは理解できます。

しかし、授業者（鈴村さんも含めて）、場面を絵に表現しています。しかし、絵や朗読はできたとしても、『やまなし』を教えきったという実感がないのは、おそらく、「クランポンがわからない」という感覚と、宮澤賢治の独特の言い回し・文体をどうとりあげていくのかといったあたりに迷いをもち、どこをどう読ませるのかという形象読みや「やまなし」の主題がみえにくいということではないでしょうか。

『やまなし』は、ファンタティクな空間（川底）が舞台になっていて、五月の「クランボンはかぷかぷわらったよ」という美しい響きは、かわせみによって壊され､死の世界へと変わります。１２月は「あれはやまなしだ」といって、再び生の世界へと変わっていくとい自然･万物の世界が象徴的に描かれた作品です。

実習生の鈴村さんも試みたように、読みの視点としては、人物像の変化（兄弟蟹と父親）を読み込み、宮澤賢治の独特の文体のいくつかを読み取らせ、五月と十二月の「死」と「生」の対比へつなげられたらと考えています。